



“問う”ことを学ぶこと

部長 大塚 俊明

「梅雨(つゆ)」という言葉は、一説には「梅の実が熟す頃の雨」に由来すると言われていいます。ちょうど今ごろ、枝にたわわに実った梅がほんのりと黄色みを帯び、香り立つように熟していく季節です。こうした自然の営みのように、子どもたちもまた日々の学びや経験を通して少しずつ成長していることを感じます。

先日、2年生が生活科の学習の一環として育てている野菜の世話をしている様子をゆっくり観察する機会がありました。2年生は、玄関わき左奥の栽培スペースを活用して、ミニトマト、ピーマン、オクラ、キュウリなど“自分の野菜”を育てています。

生活科の学習は、「何を教えるのか」という観点から見ると、一見わかりにくいものです。単なる栽培活動のように見えるかもしれませんが、実はその活動の中から様々な問いを引き出してその解決に取り組ませることで、問題解決力やコミュニケーションに必要な表現力などを育み自立への基礎を養おうとする教科です。

朝の栽培スペースはお世話に取り組む子どもの笑顔でいっぱいです。また、教室の記録カードには、「葉が茶色になってきたけど、このままでもいいのかな?」「花がしぼんでしまったのに、それがミニトマトになるなんて不思議です」「少し葉っぱが虫に食べられていました」など自分が育てる野菜への愛情や小さな感動・心配が綴られています。2年生なりによく見ているなと感心させられます。これらの記述は子どもなりの切実感ある課題の表れとも言えます。今後は、そうした課題を解決するにはどうしたらよいのか、仲間とアイデアを出し合い解決していく学びが期待されます。

知識を真に自分のものにしていくためには、

何よりも対象に問いかける姿勢が大切です。この時期はそんな姿勢を育てる貴重な機会になります。

少し古い引用になりますが、文明批評家として知られる森本哲郎氏は、昆虫記で有名なファーブルの生涯を紹介する文章の中で、次のように述べています。

「学問」とは、読んで字のごとく、問うことを学ぶ修業である。幼年期、それに続く少年期が人生で一番大切というのは、この時期こそ、心から問いを発する、そして問うことを自分で学ぶ年齢だからだ。この期間に問うことを学び損なうと、問いの情熱は一生戻ってこない。人間は「歌を忘れたカナリア」のように、「問いを喪失した」つまらぬ生涯を歩むことになってしまう。だが、情報化社会といわれる現代の子どもたちには、問う前にすでに答えがある。答えだけが無数に与えられている。子どもたちは答えだけ聞かされて育つのだ。そんな環境の中で、どうして子どもたちは問うことを学べようか。

(『生き方の研究』PHP文庫)

子どもたちの姿から感じることは、「じっくりと時間をかけて野菜の栽培に取り組む」ことによって、低学年の子どもたちも、着実に「問う」ことを学んでいるということです。もちろん、学校というシステムの中で時間は無尽蔵にあるわけではありません。限られた時間の中で、子どもの「問い」の情熱を引き出していく教師側の指導のセンスも問われてくるでしょう。

ファーブルが育んできた問いの情熱は、「本物に出会わせる」「十分体験させる」「(性急に教えず)じっくり待ってみる」といった指導者としての構えを通して、子どもの中に育っていくのだと私は考えています。